

協議1 **新学習指導要領の実施に関して直面している課題**

他県の先生方とのグループ協議

直面している課題として、学習評価に関することを協議した。評価の観点について、迷っていることや自校の実戦を元に情報交換、確認の意味での相談など意見を交わすことができた。

- (1) 授業態度面で「遅刻」「見学」「忘れ物」などを、実際の評価に入れることはあってもよいか。
新学習指導要領では、このような項目は評価に入れることは望ましくないとされている。しかし、生徒の実態や学校の指導方針として明確であれば、現状としてはあってもよいのではないか。ただし、忘れ物したからダメ、提出期限を守らなかったからダメというだけの評価ではなく、プラスの声掛けをして、生徒の態度が改善していくことを促すのが大切であるとの意見をまとめることができた。
- (2) 客観的な評価とするためには。
観点が見えにくいために様々な手段を活用し、データの蓄積をすることが必要。
 - ・学習カード
 - ・他者による評価
 - ・ICT 端末によるデータ保存
- (3) 「思考力・判断力・表現力等」はどう見とるのがよいか。
 - ・基本的にはワークシート、学習カード、単元末レポートを用いる。
 - ・運動のポイントやコツがわかっているか。単に「楽しかった」だけの記述では「C」評価。PDCAサイクルで内容をまとめられていたら「A」をつけている。
 - ・実際の動きと伴った考え方ができているかどうかで評価の判断をしている。
 - ・アウトプットする多様な見とりが必要になる。言語の活用だけでなく、実際の動きやレポートの記述を見とっていくこと。コミュニケーションによる表現が苦手な生徒でも、記述による表現であれば評価基準を達成してるものもある。
 - ・作戦会議→思考→実際の動き、という学習過程の中で、班内で活動の様子を見とってあげること。
- (4) 「知識」の活用をする場面が、学習活動内では瞬間でしか表われず、見とりは難しい。

講義2 **新学習指導要領を踏まえた各領域等における指導の在り方**

平野 泰宏（大妻女子大学・短期大学部 准教授）

- (1) 運動の特性や魅力
球技はその特性や魅力に応じて、「ネット型」「ゴール型」「ベースボール型」に分類されている。球技領域の「技能」に関する内容は、「ボール操作」及び「ボールを持たないときの動き」によって構成されている。ネット型では、サービス、パス、返球などのボール操作と空間、ボールの落下点、あるいは味方のサポート、相手をマークするなど、ボール操作に至るための動きや守備に関わる動きを、ボールを持たないときの動きと示される。
シャトルはボールと大きく異なる部分がある。シャトルは素材上、ボールのように落としても弾んでこない。自ら反発しない。このことにより、バドミントンは打撃する人の操作性の差が大きく、できる、できないの差が大きく表れる。一打で返球する攻守一体型の種目。
- (2) 学習指導要領改訂のポイント
運動や健康に関する課題を発見し、その解決を図る主体的・協働的な学習活動を通して、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性」を育成することを目標としている。球技においては、体の動かし方や用具の操作方法などの具体的な知識を理解することにとどまらず、運動の実践及び生涯スポーツにつながる概念や法則などの汎用的な知識等の定

着を図る。

(3) バドミントンの持つ特性や魅力に迫る活動

○あらゆる種目の中でも練習内容が多様であり、体力が向上する。そのために、楽しさの部分を協調し、練習させていく過程の中で体力が向上していく。

○指導現場で扱う数字（回数や時間等）に根拠を持たせるために、世界記録などの例で取り組ませていく。例えばバドミントン前史の1830年の記録に、2人の女の子が2,117回打ち続けたという記録がある。生徒の反応や興味の持ち方に違いが表れる。根拠のある「数字」は生徒が納得し、説得力がある。

○各フライトの中でもドライブを打たせることから練習を始めると効果的である。ドライブ合戦「ラリーラリー」。※1分間チャレンジ160回の世界記録を例示

○コート（ライン）の意味

コートにはシャトルの飛び方を測るための目印になっているところがある。説明して実演してあげると生徒は驚きのまなざしに変わる。シャトルは生き物である。

(4) 運動が苦手な生徒や運動に意欲的でない生徒への指導の工夫

シャトルを打てない生徒の意欲をつなぐために、打ち上げられ、落ちてくるシャトルの動きに目を慣れさせたり、ボールを保持してない時の動作や判断を教えたりする。

バドミントンの難しさは、速度変化の大きなシャトルと長い柄のラケットを使用することにある。どうしてもうまくいかない生徒には、別のアプローチでつかませる。ラケットとシャトルをうまく出合わせる、コーディネーション遊びが有効となる。

・シャトル遊び ・ラケット遊び ・シャトルキャッチ(筒入れ) ・風船うち ・的当て

講義3 新学習指導要領に基づいた指導と評価

桐原純子(神奈川県教育庁 指導主事)

○学習評価充実を図ることの重要性

学習評価は、学校における教育活動に関し、生徒の学習状況を評価するものである。生徒の学習状況を的確に捉え、教師が指導の改善を図るとともに、生徒が自らの学びを振り返って「もっとがんばりたい」という学習意欲の向上や次の学びに向かうことができるようにするために評価のあり方は重要になってくる。そのため、学習評価のあり方については、学校全体で組織的・計画的に取り組むことが大切である。

○「単元の評価基準」作成における観点ごとのポイント

「知識」…例示の文末を「～について、言ったり書き出したりしている」あるいは、「～について、学習した具体例を挙げている」として、評価基準を作成する。

「技能」…例示の文末を「～できる」として、評価基準を作成する。

「思考・判断・表現」…例示の文末を「～している」として、評価基準を作成する。

「主体的に取り組む態度」…意思や意欲を育てているという情意面の例示に対応し、「～しようとしている」として評価基準を作成する。

協議2 各領域等における体育が苦手な児童生徒のための授業づくり

他県の先生方とのグループ協議

配布されたワークシートの様式を基に授業づくりに関するグループ協議を行い、授業の展開例を完成させることができた。

運動の苦手な生徒でも「自己や仲間の技術的な課題に気づく」ということを本時の評価とし、そ

の内容になるよう授業展開を協議した。学習内容は「ねらった場所にサービスを打てるようになるために必要なことを考えよう」とした。課題は、技能別に①ラケットに正確に当てる ②相手コートに空いたスペースをねらう の「当てる」と「ねらう」の2種類にし、サービスを打つ練習からゲーム形式の練習に至る過程を協議していった。

講義4 **協議のまとめ**

平野 泰宏 (大妻女子大学・短期大学部 准教授)
桐原 純子 (神奈川県教育庁 指導主事)

- 生涯にわたって豊かなスポーツライフを営むために資質・能力を育む
全国65歳以上の女性、運動習慣のある人に対する調査結果。
 - ・運動している目的
 - ①健康診断結果をもとに、身体の機能改善を図るため
 - ②見込み感…この運動ならできる、という見込みがある
 - ②のことから、保健体育の学習の中であらゆる運動を、「楽しいと感じる」とさせておくことは、ダイレクトに生涯体育へとつながっている。
- 運動が苦手な生徒の手立て
運動が苦手な生徒はコミュニケーション力も低いことが考えられる。ICTの活用は、そんな生徒の第二の言語ツールも担っている
- ペア・グルーピング
さじ加減が必要。できるとできないを混在させることで互いの成長を期待する部分もあるが、できない生徒は、できる生徒といると申し訳なさを感じることもある。時にはできない者同士を組ませることが安心感になる。
- 課題を見つける手段について
課題を見つけさせる際には、その視点を教えてあげることが必要。ICTを利用する場合には、撮る角度や撮影の位置を考えさせてみる。
- 評価の説明責任
正しく伝えるために、評価基準の例示を大きく変えてしまうことなく、文末表現のみを変えること。